自由連合
Libera Federacio
N-ro 39
1972
5月25日
姫路市かめ山354
自由連合社
フリカエ
大阪1264
定価送共 50円

私達の現場

癩と交流の家

1

交流の家は交流の家運動の拠点ではあっても、常に現場とはなり得ない。交流の家運動の現場は日常私達が持ち歩き、というより私達自身の中にある。なぜならば意識を示さなくても私達は行動している。

※　※　※

奈良に交流の家を建てることで癩の問題の何かたらんとしたとき、奈良は〝問題の現場〟ではないという悩みがあった。そしてその悩みは、現場でないところで〝何〟ができるか、という疑問になるのだが、そのときキャンパー（交流の家を建てたフレンズ国際労働キャンプ〝FIWCのメンバー〟）は何処を現場だと考えていたかというと、何の躊躇もなく、それは〝癩療養所〟だときめていた。

実際、今日癩の患者に一度に沢山会いたいと思えば療養所に行くしかない。しかしただ患者のいるところだけが問題の現場だろうか。たしかに療養所の中にも多くの問題は存在している。しかし私達が問題としようとしていることは、療養所の中で問題となっていることとは質的に違う。それはむしろその外側にのみ存在している。

当の奈良には、光明皇后の話もあるし、現に市の北方に〝北山十八間戸〟（昔癩者が隠れ住んでいた家、部屋が十八ある）も保存されている。が、療養所のように患者はいない。

現場云々を言いながらも建築を始めてからほぼ一年経た夏、それまでは癩に対する差別を言葉の上でだけしか知らなかったキャンパーの目の前に、こういう形もあったかと思われる差別の実態が展開された。

それはこの建築に反対している地元農民の反対行動であった。前前から法主さん（この土地の持主）に対して、学生に土地を貸すのは止めてくれと申し入れていたのだが、回答がないというので直接数十人が集って団体交渉に来たわけだ。彼等の反対理由は二つあった。一つは、こんな処にこんな家ができて癩の人に出入りされてはこれからの土地の発展を妨げる、ということである。その次が、そんな癩病の人が使った水を流されたら田にも入れん、しかも君達学生は四年たてば卒業して行く、後に残った自分達には死活問題だ、ということであった。

そんな反対理由は、突きつけられるまで全然予期していなかったことだし、そんなことが反対理由になるのかと呆然とするばかりで、彼等を納得させる説明も用意されておらず、うまい返事もあり合わさず、その日はそれで物別れとなった。

この反対行動は、今までは何処へ行っても必ず御苦労さんと言われる集団であったワークキャンプの歴史に初めて現れる外部からの圧力で、だからこそやるんだという意識を逆に盛上げる結果となった。

しかしこうなった事態を納めるのは、もう単に当事者だけの手には負えず、マスコミも動き出し、やがて市長自身が反対者側にまわるといったことを経て、最終的には市会議員が調停に立って、必ずしも丸くではないがむしろ成功の形で納められ（今まで建てたものは即時破壊し、新しく設計図を引きなおすこと）、無事工事を進められることになった。

私達は、無意識に、無事平穏なところにあえて波風を立て、そこに隠されている問題を摘発してゆくことになる。

5

交流の家運動を交流の家はやはり育てていった。

（この項を5にしたのはページ数の制限によるものだが、単なる欠落、脱落ではなくて、いくらか絡めようとしても1と5の間には省くことのできない2・3・4があることを予め読者に含んでおいて貰うためである）・

この家を建設するのに五年、出来上ってから今日までに尚五年、一体ここは何をしているところかと、ときに軽蔑の眼を以って問われることもあったが、返す言葉もないほど無事平穏に平和に過ぎてきた。

しかしこれから何年続くか、何十年続くかわからない癩の歴史の上で、この交流の家と交流の家運動の占めてきた空間と、またこれから占めるであろう空間は、多分消し去ることのできない部分として残る筈だ。

これほど多勢の若者が、これほどの年月（これからもまだまだ）、これほどの回数で療養所を訪問することを誰が想像できたであろう。私達のやり方は、集団のときは、あるときは十人くらい、ときには三十人、ときには五十人を越す数で押しよせ、ワークだ、祭りだ、試合だ、夜店だと園の人達を巻きこんだ大行動をやってくることもある。一方、まったく個人で自発的に、ときに一人で、ときに二人で、「園に行くと必ず誰かに逢うな」と言われるくらい代りばんこに出没している。それは迎えてくれる側の同意が予期できなければできないことだが、ちょうど自分の娘や息子の年齢に当るキャンパー達の嬉しい訪問である。いつか心ほぐれて語りだす悲しかったこと、辛かったこと。

※　※　※

さて、今月の、つい一週間ほど前に、私達と園の人達との間に二つのことがあった。

一つはキャンパー同士のある結婚披露宴に園の人達が八人招待されたことだった。この招待客をみて友人達は「あいつやるなあ」と賞讃の目を向けた。同時にその友人達は、前の晩は八人一緒に、次の晩は二人ずつ四軒のキャンパーの家に分宿させて接待した。その八人はそれぞれの宿で感激の夜を語り明かした。園の中はいま、その話で持ちきりだという。（お互い友達であれば当り前のことなのにこんなことに感激しているなんて園の人は癩が古いなあ）

もう一つは園の中の盲人楽団が大阪の舞台に演奏に来ることである。この楽団は五年前にはFIWCが計画したやはり大阪の演奏会に出演して、そのときは交流の家

【次頁へ】

ひとくぎりつく雲行きの春のアジトに　咲かせてみましょう　真紅のアダ花！と息ばんでみたものの…。（司）

【前頁より】に泊った。しかしそれから五年経った今もやはりここしか泊る所がないのか、ということは私には悲しい。けれど折角ここへ泊りたいという楽団に向って、他へ行く方がいいのだと説明することもむつかしいことだった。が、それもキャンパーが、新しくてここよりもずっと快適で、癒園の楽団と承知の上で迎えてくれる宿舎を現に見つけてきて納得してもらった。尚当夜は附添として（盲人には一人に一人の附添が園から附いては来るが）数人のキャンパーが一緒に泊ることにもなった。

交流の家運動は新しい交流の家をもう一軒つくり得た。演奏会は二十九日だが、その夜はキャンパー共々楽団員は新しい快適な宿舎で、修学旅行のように楽しい一泊が約束されている。

交流の家運動とはこんなものだ。交流の家はその拠点にすぎない。

（奈良市中町39交流の家・紙寶）

「子捨て」と施設

子捨ての事実

カトリック団体の事業とする養護施設保母としてはや一年がすぎた。

養護施設を自分自身で、特殊なところとして位置づけてきたのであるが、おぼろげながら大きなまちがいであることに気づいた。

まず、敗戦後の孤児救済のための福祉事業の一環として養護施設が存在したのであるが、二十数年たった現在も、養護施設とはこんなところと信じて疑わず、という考えのものが圧倒的ではないだろうか。

保母として働き始め、子供のケースにふれてかなりのショックをうけた覚えがある。閉鎖的という施設に超現実的な問題が隠匿しているのだ。孤児など全くいないどころか、核家族化の社会における家庭の崩壊－母親の家出が圧倒的であり、片親の病気による養育困難……によって、子供が乳児院から養護施設等をたらいまわしにされているのが現状なのだ。

資本主義社会・繁栄の時代――いつの間にか人間まで棄てる今の文明社会の産物がこれなのである。敗戦当時の孤児救済目的の施設ならば〈特殊〉として見過ごせたであろうが、繁栄の時代の子棄てが〈特殊〉福祉事業としてとらえられているのは、単に施設を維持していかんがためのものでしかない。現在の養護施設における福祉とはもはや本来のものではなく、ゴミ箱的役割しかもっていないことを認識するのである。

ゴミ箱保母

施設に働く保母とてボロ繕いの加害者であることはいうまでもない。それを意識しつつも、現実にいる子供との日常性のなかに浸り込んで、とことん問い続けることから逃げてしまう。

時として我々も被害者ではないかと疑問をもつ。施設に追いやられた子供にも人権はある。けれど彼らがそれを主張できないのと同じように、福祉行政の末端部分の保母に何ができよう。その諦観は、保母自身が〈特殊〉に甘んじてきた結果のものである。

施設保母の問題として強制住込（全寮制）、一日労働時間十時間、一週一回夜勤（普通勤務通しの夜勤）と、厳しい勤務体制の割に給料が幼稚園・保育所より一段低いのも、全て施設が〈特殊なところ〉として規定されている由縁である。さらに〈特殊〉として力トリック団体がバックであること、奉仕の精神の強調である。

我々保母がそれらを正当なものとして受け容れてきたところに問題があるし、昔からの養護施設観にとらわれて脱却できず現実を見つめられないがための遅れも否定できない。特殊に甘んじるのではなく特殊をすてさり、奉仕を美化するのではなくゴミ箱保母を拒否することによって養護施設の保母＝特殊な職業からぬけだせるのではないだろうか。

女として生きる

子供のケースにある母親の家出を通して、女のしあわせとは何なのか考えさせられる。同じ女として共鳴できるから……。

みずから子を棄てて出ていく女――子供を連れてくる夫であった男は、妻であった女を非道な女とののしる。しかし女に逃げられるような男は女をののしる資格などもちあわせてはいないのだ。夫婦という絆、子供との絆を切り棄てる彼女も、一個の人間としてのめざめには無自覚であろう。しかし、人間というよりは女の性がそうさせるのであろう。そこに私は、むしろ人間らしさを感じる。こんな女をどんどん産みだしていくためにも、ごくあたりまえの女の生き方としてもっと真剣に考えてみなくてはいけない問題だと思う。

リブへの疑問

ウーマン・リブ運動もその一つであるが、男対女に運動を位置づけるところに納得のいかないものがある。歴史・社会からうける抑圧は、支配者というごく少数の男どもの手中に収められたものに過ぎず、そこからくる抑圧は、男の働きバチ的存在としてみることができる。それは女が女であることに甘んじてきた事実と本質は同じではないだろうか。男総体を敵とみなすことによって敵の本質を見失うことになるし、それは問題のスリカエに他ならない。抑圧をうけている男といっしょにとりくむべきではないのだろうか。

私は男からの抑圧をほとんど感じないで今まで生きてこられた。性の問題にもぶつかってないし、他人事として過ぎてきたから無意識・無自覚なのだと思う。けれど保母という立場にあって、子を棄てるまで女の生を生きようとする母親の姿を眼のあたりにして、私は、世間・しきたり・常識・法律・道徳のなかの女からそれらを棄てさり、自由で自主的な女をめざしたいと思っている。

（名古屋　木村　和）

「自衛の監獄」を保証するもの

―平和台の炎は消えず―第三集

▽70年七月に始められた平和台病院労組・共闘委の闘争記録集。（自連26・27・34号参照）

▽定価四五〇円・〒一四五円。―自連社でも取扱います。自連大阪迄。

▽平和台労組は〒神戸市長田区平和台町ノの13の2。

G社（新住所）

大阪市都島区片町2の7の8石橋荘　中川方

子供会活動から教師へ

一重うつしの子供達

釜ヶ崎子供会との関りは、一年程続いにだろうか。釜ヶ崎ワークキャンプの中で知りあった子供達と遊んでいるうちに彼等の中へ溶けこんでいきたいという気持が強まっていた。私の住む地域の子供達とは異質な部分ー釜ヶ崎の子供達は、自由さとかたくましさとかいった隅の面ばかりでなく、生活におけるかしこさ、ずるさみたいなものをもっていたーにひかれていたようだ。

そのような感情が私を子供会活動へと傾斜させていく動機となったのだが、単に子供への興味ばかりではなかった。釜ヶ崎を社会的にとらえた時、親が日雇いであることは、即、子供の将来までを規定してしまう。この現実は、私の上に重くのしかかってきていた。

ちょうどその頃、釜ヶ崎のドヤの密集したある一角に子供会をやっている牧師がいた。知人の紹介で牧師をたずね、その子供会を手伝いたいという由を伝え、その日から私と釜ヶ崎子供会との関係が始った。常時くる子供達は、20人位だったろうか。いろんな子供達がいたが、全体としてはすごく動的である。五の子の方が圧倒的に多く、気性の激しい子がそろっていた。彼等の親は日雇いが多かったから、ほとんどがドヤ住いだった。だから子供会に使っている部屋は格好の遊び場所である。そして解放区でなければならないはずであった。

学校の補完物

子供会に集まる子供は近くの校え茶屋小学校と、戸籍のない子供ばかりを集めた愛隣小学校に、二分されていた。その中の殆人かは長欠児童である。

牧師の方針は――「6年生にもなるのに本も満足に読めないことでは駄メだ」という理由から、学習面に重きを置くきらいがあった。そして何時から何時までは勉強というふうに、時間を区切って子供達に机に向わせていた。そのやり方に疑問を感じながらも子供の現実を考えると否定しきれないものがあった。

私が子供達と共にやらなければならないことは、市民社会の中におしこめられた釜ヶ崎をうばいかえすことと、学校の補完的な役割しかもてない子供会から脱出する方法を模索しながら納得のいくものが得られず、子供会は停滞。

小先生システム

長欠する子供は、学校での授業についていけず、お客様としてしか存在できないことへの不満から、ずるする休むへ学校側は何ら適切な処置を講じようとはしない。

学習面で自己を発輝する場のない子供達は、遊びの場でそれを求めようとする。

子供の現実と自己を発輝したいという子供の欲求とを考え合わせたところで子供会を把握しなければならない。そこで学習面において次のようなことを実行に移していった。

小先生システム――各人が持ちまわりで先生になりグループを指導する。この方法は、始めのうちは子供達が自発的にやっていったので、ある程度まで成功したのだが、長続きはしなかった。各人に差がありすぎ、できる子――できない子の対立をきたす結果になった。

その時、私を含めた大先生(?)達は手をさしのべることはしなかった。〝お膳立てはしたよ。後はあんた達でやるんだよ〟という無責任な態度がつぶれる原因の一つであったことを反省している。

でもできない子

しかし、今気付くことは、現在の教育のシステム自体が能力主義をオ一としている以上、子供会の中だけで新しい試みをやってみても、それは砂上の楼閣に等しいものだと思う。

たとえ新しい意識が、子供会の中で芽ばえたとしても、社会の裏付けがない限り芽は育ってこないだろう。何故彼等が〝お客様〟なのかを現在の公教育に向い返していかない限り問題の糸口にはならないと思う。又、〝できない子〟というレッテルをはられた子供達のエネルギーをも押し殺してしまうことは容易に考えられる。

子供達から学校の不満を聞くたびに学校をつきあげることを考えたが、力としてやはり弱いことを認めざるを得なかった。

教師として

71年10月から大阪市の小学校に勤めている。そして、この4月から3年生の担任となった。学年はじめはどこでもそうなのだが雑務整理で追われ教材研究も満足にできない毎日。それでも今年はじめてクラスをもったからやる気だけは充分ある。

3年生といえば一番ヤンチャな時期でうらやましいくらいエネルギッシュである。授業中もジッとしていることはめったになく、ベルがなればひもとかれた子犬のように運動場へ飛び出していく。

黒板は落書きだらけ、机の上にはくつ跡が……。ハッと後をむけば4階の窓へ上半身をつき出してギャーギャーよろこんでいる、といった状態だ。フーとため息をつきたくなる。

何とか落ちつかせたところを見はからって授業を始める。昨夜遅くまで下調べしてきたノートをもとに進めていくはずが、なかなか思うようには運ばない。子供の反応がその時々で変るから簡単なところでとまどったりする。全ての子に理解してもらうには、とうてい予定の時間ではでは足りない。

釜ヶ崎で子供会をやっていた時は子供の一人一人の立場に立って教育を考えることができたが、教師というカンバンをさげると、つい、45名の生徒＝学級集団としてとらえがちになる。授業にしても、教科の時間配分などの関係から、クラスの何%きでわかれば次に進むということになる。そのようなこと一つとらえてみても自分の教育に対する姿勢を点検しつづけなければならないと痛感する。

バリケード

ある日の算数の時間のことである。一応どの程度まで理解し得たか単元の終りにプリントの問題をさせてみた。その時一斉にとなりとの机の間へ子供達は二人ずつすわっているしにバリケードをきずいたのである。それは、ランドセルであったりふで箱であったり……。

プリント→テスト→友達に勝つ→バリケード。子供達の頭の中にはすでにこの図式が成り立っていた。

【前頁より】このようなことは形を変えて事あるごとに現れてくる。

学級委員選挙

新学期になると口には出さないけれど子供達の関心は一点に集中する。学級委員選挙がそれである。

ある日の学級会の時、学級委員の代りとしてそれぞれの係を決めることになった。連絡係、美化係などである。それらを黒板に書き出していくと

「先生、学級委員がぬけている」といつもみんなを笑わせるKが言った。

バッヂをつけた学級委員は彼等にとってクラスにおける実力のバロメーターであり、又特権階級であるわけだ。

「学級委員になったらお母ちゃんが一万円くれるっていうてんねん」と平気に口に出していう。そう言う子供は学級委員にはなれない子供であった。

学級委員の条件の第一は、勉強ができることである。親は我子をエリートの位置につけるため躍起になる。学級委員はいうなれば能力主義をエスカレートさせる役割を果しているといえる。そして昔からその役割は依然として変らず、先生の下請けだ。子供達にとっては、〝カッコイイ〟わけである。

〝バッヂ〟をつけて先生の代りをすれば、子供心に〝みんなとちがうんだ〟という意識をもつのは当然だろう。

しかし学級委員など悪影響しかもたらさないと思っていても、学校のワクの中にいる限りは〝うちのクラスだけはヤメテマス〟というわけにはいかない。幸い青年部(30歳までの職員で構成)の中にも同じ考えの人が多く、話し合った結果、職員会議にかけることにした。

職員会議では、弊害をなくすという理由から、学級委員の認承状及び式、バッヂは廃止になった。しかし

「学級運営上まとめ役は必要なんだから学級委員は廃止することはできない」　そして

「今後の教育指導において子供の中にくすぶっている特権意識をなくしていくよう努力されたい」に落ちついてしまった。

バッヂがなくとも、やはり子供にとっては以前の学級委員なのだと思う。子供の頭に焼きついたイメージは、そんなたまぬるいことでははらいきれない。

この件に関しては職員会議で、ずいぶんがんばったつもりがやはり力量不足だったようだ。

〝物事を主体的にとらえて実践する子供を〟ということが現場でよく言われる。真剣にそう考えるのなら、即ちに学級委員を廃止し係を流動化させるべきである。その中でしかとり組めない問題だと思う。

学級経営の主体

「学級運営上、まとめ役は必要なんだから学級委員は廃止することはできない」ということばの中に教師の怠慢、逃げを見る。確かにまとめ役を置くだけで教師の負担ははるかに減る。学級が乱れておれば、

「学級委員、何をしとるか」の一言で片付くのだから。そして学級委員はその責任のもとに、学級を何とかおさめようとする。それは、おさえるという方向しかもたない。その時に切りすてられる部分は無視されていく。そして何とかなり立った学級を見て教師は、

「うちのクラスは、うまくいっている」と楽観してしまう。小学校の場合は、生徒は権威に対して弱いから矛盾が表面化せず、教師は自分のしていることの犯罪性を自覚できない。自覚できないところに学級委員肯定論がのさばってしまうのだろうか。

いや問題はもっと別のところにあるようだ。学級経営のとらえ方にあやまりがあるのではないだろうか。

多くの教師が、学級経営の主体を教師におく。そういう場合、大なり小なり児童は切り捨てられるべき存在となる(主体を誰におくかという場合、当然、児童観が問題になってくると思うが……)。学級を構成しているのは教師と子供である。ならば、その構成メンバーである教師と子供の両者が主体となるような学級経営を目指すことが基本姿勢なのではないだろうか。

実践の第一歩として〈班〉作りを試みている(〈班〉とは、交替する班長を核とする自立小集団)。まだ〈群〉の域を脱しきれないでいるが、気長にやっていこうと思う。

(大阪　岩田　芳子)

視えない時

イライラリブでなく リブ!!

今年二月、西成区で子売りがあった。覚えてる?その頃風呂屋さんでこんな話が聞こえてきたよ。もちろん女風呂。

A「子供売るやなんて、この頃の若い女はどない思てんねやろ」

B「うちら、死んでも子売りなんかようせんわ。育てられへんかったら生まんでええのに。母親の資格なんかないわ」

某火曜の夜。Bアジトに五人。さっそく例の風呂屋の件。私・ムカツイてた。「その子売りの女は私や!!保育所は少ない・給料は安い!!この世間で子連れ女が生きてくの、しんどいやんか。そやのにあんなこと云うて!!。くやしいて!!」その夜あげく「あのおばちゃんらの亭主たぶらかして蒸発させてもたろかしら。ほんならたちまち困って、あんなこと云えんようなるわ」

それからがえらいことになった。私は、Kさんほか男の方にジンワリ批判されることにオチいった。

「すじちがいやで。たとえおばちゃんが自分の身をもって、こんな世の中やから子売りもしかたないと思っても『あの女が、亭主をたぶらかしたあの女が悪いんだ』と思うやろ。おばちゃんは世間の抑圧に気付いてるのとちがうか?それに真向うから立ちむかうと、それこそ子売りへ三途の河や。彼女達の子売りしないようにという努力を全的に、あんたは否定できるか?味方を敵にするな」

それから約二ヶ月、私はおばちゃん達に対するムカツキとKさんの指摘を両股にこだわりつづけた。ウワサ話・電車内での子供の成積の話、耳に入ってくる女の声にことごとくイライラした。

女がイヤだった。女ばかりが眼についた。私とおばちゃんはちがうんや。そう無意証に思いつづけてた。

女の軋み

敵も味方もないものぐらい、カタルシスが不可能であるものはない――ノリオ　71・6・10

男は、女の身体の軋む音が聞えたことがあったであろうか。ギシギシと軋む、悲しみとも断念とも名付けようのないこの音。

若い女が、生きることがただ流れていくことにしか連なっていないことを自覚し、その流れから身を起こそうと自らの存在をかけて立とうとするときに。あるいは女が自らの人生にあきりにも大きな欠落があることに突然のように直感したとき、暗闇を前にして、女の身体はギシギシと軋む。

男を愛するときもこの軋みから解放されることはない。むしろ女は男を愛するとき軋みが聞えてしまうのだ。愛することは軋みからの解放から遠く、むしろ激しく深く軋む。ただ女は男を愛することの中に大きな幻想をいだいてきたと思われる。そして突然のように自らの身体の軋む音を日常の真只中で思い知らされてきたのだ。私にはこのギシギシとなる軋みから解放されるイメージすら思いえがくことが不可能なのである。軋みは軋みであり、言葉ではない。しかし、女が日常にはく言葉、それはいらだちの言葉であったり、男に対するうらみがましさのものであったり、あるいは男に対する物わかりの良さであったりする言葉の片鱗にその軋む音の跡をとどめていはしないだろうか。軋む音の聞えない男を前にして軋みを伝えようとするとき女の身体はねじれていく。

堕胎手術の最中に耳なりのように続くあの音は何であろうか。キーンキーンと。まるで自らの身体が内びき機にかけられてでもいるような。ハガネとハガネがすり合うような断え間のない音が身体中に響きわたっている。忘れ去ることがないかのように今も白々と音はなぎっていく。あれは女が恐ろしさに軋む音ではないだろうか。女は男にそれを伝えたいと願いながらそれは語り切れないものとしてある。語り得ないから軋む。言葉で伝え切れぬものを前にして男の沈黙する顔が白々と見える。

×　×　×

「女」のグループは、軋みから解放されたいという願望のひとつの現われでもある。自らの軋みが女達の軋みの連続にあることを思い知っているからである。身体を軋ませる者同志としての信頼関係がそこにうちたてられる。言葉はそのとき信頼関係を形づくるひとつの方法になり得る。たしかに軋みの原因を社会の抑圧と考えるにしろ、又男の差別に見るとしても、女は弱みから連なりの関係は出発した。日常的な断え間のない軋みから弛緩されたいという願望はそれをさく表現しているかも知れない。しかし連綿と続いた女の軋みの根源を見極めようとしはじめたとき、今きで風化し続けて来た言葉が少々なりとも女と女の関係の内に定着する可能性を見出すことが出来るようになる。

「女」のグループが軋みながらも「女である」という表現を獲得しはじめた頃、私はある男からこんなふうなことを言われた。「なんであんたは男をもっとやっつけないんだ。糾弾し続けなければ男は解からないるし」と。男が女に糾弾しなさいというのだ。私は自分の身体がねじきがっていくのを感じた。それを言葉にすれば「男を好きだからなァー、やっつけたくないなァーし」というふうにしか表白し得なかった。男になりたいのでもない。男と敵対したいのでもない。女であろうと身を起こすかし現実に女でありたいのだ。しかし現実に女であろうと身を起こす時男のはく言葉の内に、姿勢の内に、存在のあり様に、敵対せざるを得ない。女を窒息させ生かさない侮蔑と差別を見たとき、女は身を軋ませながらそれに対抗ってきたのではなかったか。軋む音さえ聞えずに、そのいたみを知ろうとすることもなく糾弾しなければ解からないという開き直りは、断念せると強制していることと同じなのである。言い出せばきりがない。こんなふうに言ったのもあった。「ＷＡＲ（これは言った本人の名）を糾弾する会」というのは女で作ればし」と。そうすすめてくれたのは男であった。男を愛するから糾弾したくはない、愛しているから糾弾するのだ。このさけ目で女は身体を軋ませているのだ。

男の内にある女を差別し蔑視する感性は、男がそれを望んでいるからあるのではないだろう。女を差別し蔑視する感性を拒否するから自分にはその意識がないというのなら、それはあきりにもオポティニストではなかろうか。そのオポティニストは女にとっては絶え難い存在である。その存在は、その感性は、その上にあぐらをかいた女への愛は、女の身体を軋ませる根幹をなしているように思われるのだ。

×　×　×

愛の問題をさけて女と男の問題を語ることはできない。愛の問題をさけて女の解放を語ることは不可能なことである。女が男を愛することと、男のそれは同じ言葉でありながら全く違うらしいのである。男と女は今同一の地平にいない。そこで男と女の愛の関係はどうううたてられていくのか。女が男を愛するとき、女の愛は男へのサービスに堕落していくのはなぜであろう。男の願望する役割を受け入れさせていくしかない男の愛とは一体何なのか。そうしか愛せない男とは何なのか。それは愛するということなのか。

私は愛の定義をさけて語り始めてしまっている。定義から始めなければならないとしたら私にとってそれは現実からかけ離れてしまう。あまりにも現実が重い。男への愛は軋みから解放されずきすきギシギシと音をたてる。その軋みを男が耳にすることなしに男と何を語り得るというのだろう。言葉は全く空しいものになりはてる。

もし女が男を愛さなくなったら女の問題はあらかた解消してしまうだろうへこれは決して解決ではない。まして解放からは全く遠い）。そしてその後に来るのは、白い血の流れる冷々としたセックスがゆらゆらと残るのであろうか。それは恐ろしさを通りこしたものである。そして男も女ももう生きることへの願望も欲望も熱も失なってしまうだろう。

女の血は熱く燃え、軋みながら肉体の底深く沈潜し、泥をくぐり泥をすくってやさしき存在として、熱き存在として化身して行くだろうか。私は今も自らに化身への願望をもち続けている。

（しきこ）

風の太夢

ぷぁ〜ん
＜風＞にのって
海のにおい
女のにおい

田娘……

時折、私は自分の顔を美しいと思うこともある。しかし私の心はいっこうにやわらがない。この顔だちは優しさを含まない。やすらぎを含まない。額にきざまれたしわは、時折痛ましくすらある。あきらかに心に平安をもたない額だ。つつましく地味で、しかも消えいるかのごとくでありながら、いきどうりを秘めた悲劇の相である。のびやかな平安なやすらかさはこの顔からは望めない。それをわすれてしまったのか、みいだせないのか、はじめからさずからなかったのか、はっきりとはしない。しかしたったひとつはっきりしていることは、私の顔の一種の善良さは、南国の島のものである。奄美の女性の大半が、善良な優しい目に内気と憶病をたたえている。小柄な身体も、ほぼ島の特徴を示している。

そのほかの特徴は、父方よりは母方の血筋をより多くうけついでいる様だ。痛ましい顔だちは母とかさなりあう。それは多くを望みしかもその大半を見失い、手に入れえなかったものの後悔をあらわしている。

毎年、一回、島をよぎる大風。なすすべもなくたたずみながら、耐えている顔である。

そのたび毎に、石がきをくずされ、年々、形がくずれていくのをただじっとみている。そんな感じである。奄美の女達には、おおむねおおらかさは欠けている。無知の中にも、彼女達の、まずしく生業を守り、たくさんは望まず、謙虚である。時折島に流れてくる都会の風にある種の羨望をいだきながら、片時も彼女達の生活をわすれることはしない。

彼女達にあるのは、毎年、島を恐怖におとし入れる大風へのおそれと、奇妙なあこがれなのである。

ある時、立身の夢をいだきこの島を捨てた者は、島の女達のたくましさを、極単なきまじめさと、気丈さにすりかえてしまう。それはさすらいの相であり、のびやかな逆梁をとりあげられた苦脳の相をあらわす。

私がはじめようとしている旅は、私自身に至る道であり、私を通り越し、奄美の女達に至る道であるとも云える。はれやかな笑みをとりもどすためには、この私を通る外はない。

（大阪・柏木操）

子育て？

子供を産むことと子供を育てること、が意訳の中で連続的ではない――つまり子供を産むことを肯定しているわけではないのに産まれた子供を育てることを、現実的には肯定せざるをえない、ということろに私自身非常にあいまいなところがあるように思います。

だから自分が産んだ子供を「自分の子ども」としてかかえこみたくない、という気持ちがするわけで、集団保育などはその逃げの手の一種かも知れません。

保育ということなどを考える時、母親がわりとしてまず保母像が考えられるけれど、そうするとほんとうに私など自分の子ども一人でもものあましていて、たしかに保母にむいていないと思うのだけれど、自分の子どもをじょうずに育てられる人がはたして集団保育の適任者かというと、かならずしもそうでもないと思う。

今のところ私自身の幼児期の追体験として、いろいろな子どもたちを私の分身として接することによってできるだけ楽しみたいと思っております。

どうも昔から、「女らしい」などといわれたことは一度もなく、また「女」の問題は、基本的には性とかエロスの問題であろうとも思われるのですが、その方も全く自信がなくへということいい方も変ですが、どうも私などは男でも女でもなくて、「女」の欠如体みたいなものではないかというコンプレックスでいっぱいです。

（福岡・乱）

女一人どこへゆく……

ある新聞に三・四女性解放集会の記事がのっていた。三里塚芝山連合空港反対同盟婦人行動隊長、長谷川たけさんのアピール「私達三里塚の女は闘いを始める以前は新聞にも社会の出来事にも関心がなかった。しかし今では男をもしのぐ代動隊との闘いを通して、佐藤政府がどういうものかもわかってきた。この闘いこそ女性解放だ」――土地をうばわれるということが農民にとって死活問題だから、農民の生き方を貫徹する闘いをすることは「こうあらねばならぬ」とおしつけの「生き方」を強要するものを粉砕してゆく。確かにそういう闘いこそ女性解放の闘いだ。

でも、あたしにとって死活問題となる生き方とはなんなのかしら。小ブルといわれる階級に属し、サラリーマンの父をもつマイホームに育って「女の子」として育てられてきたあたし。あたしは何を奪われているんだろう。

小説家になろうとか、絵書きになろうとか、たくさん志をたてたけれど、それはいつも「かわいい女の子」の受けいれられる社会で、「かわいくない女の子」がなんとか生きてゆかなくっちゃと、幼な心にも経済的社会的生存权と、直感したオールドミスの孤独への恐怖が精神的安息とを求めたからではなかったか。女の生き方は結婚という社会の構造にあてはまらぬ目算であたしは生き方を模索した。けれど、あたしがあてはまらないと恐怖した結婚制度は男との「ふれあい」の場所として存在していた。女のあたしが男との「ふれあい」を求めぬわけがないではありませんか。

男とのふれあいを求める女の類的本質を私は否定せぬ。女たちはその成就のために種々の条件をつけることに苦闘し、同時に社会は女を結婚に閉じこめている。女は自らの類的本質の要求と、経済的社会的生存权確保のため、その「生き方」を自らのものとすべく努力する。けれど、その過程であたし達女は何を失ってゆくのか？私の女としての類的本質の欲求は、閉ざされた状況の中でいかに疎外されてしまったのだろう。女である私自身の根本的な疎外は、総体としての私自身が何を欲しているのかさえ、わからないほどに、私自身をむしばんできた。奪われたものをとりかえしたい。奪われた私自身をとりもどしたい。私の〈女〉が語り始めなくてはだめだ。

（関西リブ代表誌・女から女たちへ）

在村マサヨリ

とらわれからの解放

―あなた方のしたことは、一人の人間の、いや一つの家族の存在基盤を奪うことになるやも知れんのですよ。

―でも先生、女性の立場からすると、彼女が自分の〈生まない権利〉を主張したとも言えるんじゃないですか？

―あのね。食事を与えないことと、その口をふさいでしまうこととは全然ちがうでしょ!?

とらわれ

昨年の夏から秋にかけての数ケ月、私は全くすさみきっていた。初めてはいたが、仕事を持っているといえる程ウエイトをかけておらず、それは生計を立てる手段にすぎなかった。私の一日一日は、どこにいても、何をしていても、〈とらわれ〉の二四時間だった。

二人の棲み家を遠く離れた場所で、相棒が入院加療を余儀なくされた。夏の盛りの頃だった。手術には家族の立合いが必要という。私は取るものもとり合えず病院に駆け付けたが、それは勿論〈家族〉としてではなかった。

秋の初め、自宅治療が必要な相棒は、寝たきり半病人のまま退院、〈家族〉のいる〈自宅〉へ戻っていった。私は心ここにあらずで、喰ってゆく事を続けねばならなかった。

とらわれからの解放

この夏の出来事は、私たち二人がいい加減で放っておいた諸々の問題を鋭くつきつけた。その中で私が覚えたのは〈待つ〉こと。そして私たちの棲み家は、少くとも日常生活に支障をきたさない程度の健康人が意志して創り出す空間であることを知った。露呈された問題は、私たちのくらしを持続してゆくなかでしか解決に踏み出せない性質のもんなんだろう。時間をかけて私を伝達する―これが荒廃の数ケ月から体得した答だった。伝えるべき私が〈とらわれ〉の直中にあったのでは、お話にならない。それに、私自身、重苦しい〈とらわれ〉の中で窒息しそうだった。日常の一つ一つを具体的に変えることに焦り出した。自分の世界への欲求が大きくふくらんでいった。一人で居る時の自分を保障するもの、それを私は転職に求めた。私の仕事、私の領域をもった女として、相棒と出会いなおすこと。決めた!

仕事

十一月某日、Sさんと初めて面接。強引に就職して、二番目に出くわしたケース。幻聴もとれ、症状も一定してきており、通院にきり替えることも出来るにも拘ず、Sさんをはさんで父親と夫が対立しているという、家庭的問題があるために社会的入院の処置をとったケースである。

現在、通院加療中の夫Kさんは、内縁関係は続けるという前提のもとに、法的に協議離婚することを望んでおり、Sさんに対する父親や私の働きかけも空しく、外泊中の彼女を伴って、離婚届を出してしまった。「一緒に住む言うてくれますし、言う通りにした方がええと思うて……」。法律が女性を保護している側面のあることを繰り返すも、後の祭り。Kさんには何の恨みもつらみもないけど、してやったりというKさんの笑顔がチラついて、何とも空しい。Sさんが〈Kさんの病気の手段に使われている印象が、どうしても拭えない。

私は、半素人の強心臓で、精神科のケースワーカーという職に飛びこんだ。男女合わせて一二〇床余。「家族との調整がしたい」と、いかにも紋切型の言葉を並べて。私はケースワーカー（特に精神科の）というのは、医者と似た一種の技術職だと考えている。対外的には、恥をかくことを第一としてアチコチへ出かけていった。しかし対患者、対家族になるとそうはいかない。断片的な知識の運用ではどうにもならない程に患者のかかえる問題は奥深いのだ。私はもっている限りの人間観をぶつけることを、対患者関係の基底に置いた。社会に有用な人材を作るのに手を貸したくはなかった。そもそもケースワーカーとは、管理者の手先、権力の出先機関でしかないらしい。〈断じて「……である」とは書かない。立場の論理をのり超えて闘っている人たちを知っているから〉。

条件づくり

Sさんとの関係も、女としてのSさんの生き方と私の生き方をつき合わせる格好で面接を重ねていったのだった。そこで彼女が一つ一つ主体的に選びとる方向は大切にしてきたつもりだ。Kさんのくらしぶりを聴き出しながら、そういう男と関りながらどういう風に生き抜いてゆくかなんてSさんと話し合いながら、いつか彼女の椅子に座っているのが私で、もう一人の私が口をパクパクさせ、〈自立〉とか〈男を頼っていては……〉と話しかけている。―そんなイメージが何度かダブったのを覚えている。

× × ×

「あのォ、もう子供も一人いるし、これ以上出来ても困るので、手術しようと思うんですけど、身体に悪いことありませんかしら」

「前の子供さんは計画してつくらはったの？」

「いえ、ちがいます（笑）。あの子を産んだ後くくっとこかいう話があったんです。その時は主人も、やっといたらよかったなと言うてましたし」

「そうやね。絶対確実な方法ではあるわね」

× × ×

手術を不服とするKさんの意を受けて来られた工医師の反論に、私は口をつぐまざるを得なかった。そう、私は〈条件づくり〉を怠っていたのだ。〈避妊〉が目的なら、経口薬もあるし、出産経験者ならリングという方法もある。卵管結紮が〈避妊〉の〈方法〉かどうか疑わなかった。

子供を産む産まないの選択は最終的には女の行うところだ。孕ませた男は、女がどうしても産むと言いはる時、オタオタと自分がするべきことを考えればいいのだ。

としても、としても……である。今のところ〈子供〉が自分の視野に入ってこない私自身がSさんとの関係に割り込んでいたことを、素直に認めなくては―。〈とらわれ〉からの解放にはまだまだ遠い。

どんどん外へ出てゆこう。遠心運動をはじめないことには、問題の本質をつかみ取る感覚がなくなってしまう。

（大阪　渡辺　今日子）

(前ページより)

そんな私に、スッキリする日がきた。リブ前昼夜祭以来。

寂事と、子供と亭主の世話。なんとなくエネルギーをうっ積させている主婦。そんな存在の女が、〈私は!〉をたしかめるのには、「私はちゃんとやっている。子供を売りはしなかった!」というのがてごろ。

〈何か変だなぁ〜〉〈ブツブツ〉を〈私は!〉の中で何とかゴマカシていく、うまく昇華(?)させていく女。

その反面、子売りの女はどうしても、〈私は!〉が分裂してしまった女。

矛盾は矛盾なんだ!!ー矛盾と思わなくても、頭と体がイヤイヤしたーと、〈子売り船頭〉になっていった女。

矛盾を矛盾と感じさせない、女を〈子売り船頭〉と〈抑圧を知らないかのごとく子売り女を非難する女〉に分裂させるものは、何?

ここまでかいて、イッヒッヒ!!実にまわりくどく、クルクル◎。何を真面目づらして云いたいのんか?が出すぎるのは文章がつながらないせいだ。…閑話休題…

視えたときー暮らしの中で物価高、亭主とのこと、子供とのことでのもつれ、葛藤があるのが手にとるようにみえるようになったときー私は、おばちゃんを全くバカにできなくなってしまった。

ここで一件落着。私はリブ。おばちゃんが眼になかった以前の私は自己変革のみのイライラリブ。味方を敵にまわしかねないイライラリブに御注意!!

おばちゃんとリブは、又私は、どう連がっていくのかは、いまだ不明。

(踊り子ーRUI)

37号2ページ「二百人の畑に七千人」の中、〈勢兵簡政〉は誤用で、正しくは〈精兵簡政〉であると〈東京・ごんたろう〉氏より指摘を受けました。

編集室

♀教師はきわめて社会的規制の強い職業である。生活次元においてさえ自由を許さない。反逆した場合、白眼しされるだけにとどまらず、何らかの制裁を受けなければならない。

例えば、教師が〈同棲〉していたとする。その場合、「そんなふしだらな行為をしている教師に、大事な子供をあずけられるか!」と、学校及びPTAになって、直ちにしめだされてしまうだろう。生身の人間である前に模範的人物でなければならない、というのが一般的な考えなのだから。作られた時、意識と行動の間にかつけられた像を不本意にも押し裂きたすものである。私がいい例だろう。

私は教師として就職する前から男とくらしていた。そして今も。制度としての〈結婚〉に納得がいかず、二人の関係を私なりに自由に考えたかったというのが理由の一つである。しかしながらそれを公然と云えないところで私の生活は築かれている。学校の職員名簿には親の住所がしるされている。「○○さんどこから通っているの」との問いに答える時いつも、後めたさを感じる。教育の問題に関して考え方が合う若い教師でさえ〈秩序〉には反動的だ。

「社会的規制に対して君は何もしないのか。云えないといううとはしないのか。云えないということに甘えている」甘えていると云われればそ定できない部分もある。しかし、どんな方法でやっていけばよいのか今の私にはわからない。(英)

♀まともに立が書けるのか疑しい。それほど立とは無縁の私にとって、書くことは一つの闘いのスタートであり、ごく内なる個的な闘いを担っていくべくチ応えとしたい。だから当然、自分自身のしが語れない。今まで私が目を通した自連紙のなかに、〈でく個人的な記事〉が見当らなかっただけに、非常な気恥しさを覚える。〈レヴェル〉からいって次元が低いのは事実だし、背のびしようもない。みんなからのケイベツのまなざしを意識しつつ精一杯書くしかないとあきらめた。

♀女の自立、〈うするに私の自立〉と、私にとって仕事とは何かを最近考えてます。(T・Y)

♀女の井戸端会議にもの申す!神が己れの姿に似せて男をつくり、そのアバラ骨の一片で女をつくったーというのはけしからん。というより、そんな神話を伝承してきた女たちや男たちの生が、悲しい。

权力と斗っていると自称する男が、权力との対峙構造と全くちがった構造で女とかかわり、自分の弱さや不危の補償物としてしか女と関係しないのを耐えながらも救してきたのは女たちである。自らの斗いへの一定の正しさの確信だとか、それでもっきまとうどうしようもない弱さだけを女に押しつけて同化を迫るのを愛だと思いこんでいる男の权力志向を見抜けなかったのも女たちである。人間関係の革命ーユートピアーへのあくことのない衝動を、例え权力と斗っている人間同士の間にせよ、ともすれば权力との関係とはあよそ無縁のところに燃焼させることを続けてきたのも、やはり、ミクロ的な〈関係の意識〉に敏感ではあっても、ことの全体性をとらえきれなかった女たちである。

あわされた、こうされた、と言っている間、女たちは自分の言葉を語れないし、男と权力への告発と同時に〈そういった状況を救してきた自らを対自化し、追求するのでなければ、斗う女たちもありえないだろうと思う。女だというだけで、ツーとくればカーとくるというのはあるし、それはうれしい関係にちがいないけど、これから女たちがどう斗っていくのかということになると、それだけではどうにもならないところにきていると思う。女の井戸端会議もそろそろやめた方がいいんじゃない。なにしろ、今回の自連は男なしにはできなかったんだから。(高村ちえこ)

♀自連社とのつき合いは長いが、不真面目社員の典型を自認している私。40号近い発行なのに、その紙面に女が投稿したことの少ないこと。A・Bアジトへの出入りの割合からしても、女の書く率は低いのである。

女がいつまでたっても社会的に受身な立場から抜け出せない一つには、自分自身を去勢化しないことがあるのではないだろうか。今号の編集を〈女ばかりで埋めて〉と引き受けた理由はそこにある。各地で、各領域で、生活を丸がかえにして、内なる課題に取り組んでいる女たちの息づかいを伝えたかった。ここに登場したのはごく一部にすぎない。(東京からも金沢からも京都から四国から…無念の思いが残るばかりだが、次の機会にはぜひ、と思っている。)書くことが苦手な人の方が多い。そんな女がトツトツと自己表現をした、存在証明号のつもりで編集した。

投稿者の紹介をしておきます—〈紙費〉さんー交流の泉の住人。FWCの悪童どもと始終交わっているせいか、とても大正生れ(?)とは思えない。通称〈おばさん〉。〈おばさん〉と呼ぶ意識の裏にあるものについて近々大論文が出るかも知れず、その際には是非紹介します。〈しきこ〉さんー高校の同窓生同士からはじめたパンフ〈女〉に、その生活の生々しさに惹れた若い女たちが多く集まってきています。大阪に住む、二児の母親。

他の女たちは、その文章から自由に想像してください。

♀ ♀ ♀

「いわゆるエッセイ集やな」という声。なチカチの論文はありません。しかし出来あがったものは気になってシャーナイのです。反応を伝えて下さい。まさしく自連紙が媒体となりうる時だと思います。

(おんな自連・仏の編集長　司)